第５回 『高等学校 新地理総合』第２部第１章２節「世界の気候と人々の生活」での地図帳活用

地図帳から読み解く「世界の気候と人々の生活」

関西大学高等部　中村 明信（なかむら・あきのぶ）

『高等学校 新地理総合』
第２部第１章２節
『新詳高等地図』

■地図帳から読み解く世界の気候区分

世界の気候を学習するうえで、気温と降水量から世界の気候を分類した「ケッペンの気候区分」は、それぞれの地域の気候の特徴が分かりやすい。『高等学校 新地理総合』（以下、教科書）にも p.65「3 **ケッペンの気候区分図**」にて世界地図が示されているが、『新詳高等地図』（以下、地図帳）では p.141～142「**①世界の気候区と海流**」（ 図１ ）でより精密に描かれていて、世界の気候を大観することができる。ケッペンの気候区分では、赤道周辺の熱帯気候（A）から、高緯度側に移るにつれて、乾燥帯気候（B）、温帯気候（C）、亜寒帯（冷帯）気候（D）、寒帯気候（E）とアルファベットの ABC 順に気候帯が分布している。緯度などの気候因子も確認しながら、各気候区の気温や降水の特徴について、雨温図やハイサーグラフも見比べながら確認していきたい。世界地図で世界の気候区を見渡すと、「赤道付近にもかかわらず、南アメリカの太平洋側やアフリカ大陸の東岸付近に熱帯以外の気候区が分布しているのはなぜなのだろうか？」や「大陸の東岸と西岸で気候区が異なるのはなぜなのだろうか？」などのいくつかの疑問が浮かぶ。地図帳では「山岳の影響を強く受けている地域」や「海流」などの気候因子が明示されているため、標高が高いことにより平均気温が低くなることで気候帯が温帯などに変化していることや、緯度 40 度付近では暖流の影響を受ける東岸と寒流の影響を受ける西岸で気候区に違いが見られることが分かる。

また、地図帳 p.143 ～ 144「**気候（二）**」を活用すれば、気候要素（気温・降水・風）の学習にも有効である。

■植生と気候の関わり

ケッペンの気候区分は、植生と気候の関係に着目して分類されていることから、世界の各地域の植生の特徴を学習することも大切である。地図帳 p.142「**②世界の植生分布**」と地図帳 p.141 に描かれている各気候区の植生の模式図（ 図１ ）を利用すると、各気候区の植生のおおまかな分類とそれぞれの植生の特徴を比較することができる。例えば、熱帯雨林気候であれば年中高温多雨であることから植物の成長が強く、数十mの樹高の常緑広葉樹の密林が見られる。一方、サバナ気候は乾季があるため乾燥に強い樹林と草丈の長い草原が見られる。このように、模式図を利用することによって気温と降水が植生にどのような影響を与えているのかを関連づけて考えることができる。

■地図帳から読み解く温帯の生活（ヨーロッパ）

教科書 p.68 ～ 75 の各気候帯の生活についての学習において、「深い学び」として気候と植生が衣食住や産業にどのように関わっているか事例地域を挙げて説明する課題があり、地図帳を活用して理解を深めることができる。例えば、「**温帯の生活**」についてヨーロッパの事例を使って確認してみよう。地図帳 p.63 にある「**①ヨーロッパの農業**」（ 図２ ）と「**②ヨーロッパの気候**」（ 図３ ）の主題図を見比べてみると、ヨーロッパの気候と農業を結び付けて考えることができる。ヨーロッパは高緯度にありながら、沖合を暖流の北大西洋海流が流れ、その暖かく湿った空気を運ぶ偏西風により温暖な気候が広がり、西岸海洋性気候や地中海性気候が卓越している。西岸海洋性気候が広がる地域では混合農業や酪農が盛んで、小麦やてんさいなどが栽培されていることが分かる。地中海性気候が広がる地域では地中海式農業が盛んで、乾燥に強い樹木作物のぶどうや柑橘類の分布が見られる。本事例ではヨーロッパを取り上げたため、大陸西岸の気候を中心に人々の生活との関連をひもといていったが、大陸東岸の気候に注目するならば、アジアや北アメリカ・南アメリカの資料を活用することでヨーロッパとの共通点や相違点について比べることもできる。

■地理の授業で地図帳が果たす役割

地理を学習するうえで、地図に学習した情報を落とし込めるようになることが大切であるが、地理を苦手とする生徒たちはそもそも地図をふだん手にすることが少ない。そのため、地理の授業時間だけでも地図帳を手にして、地図を見ながら地理を学習してもらいたい。

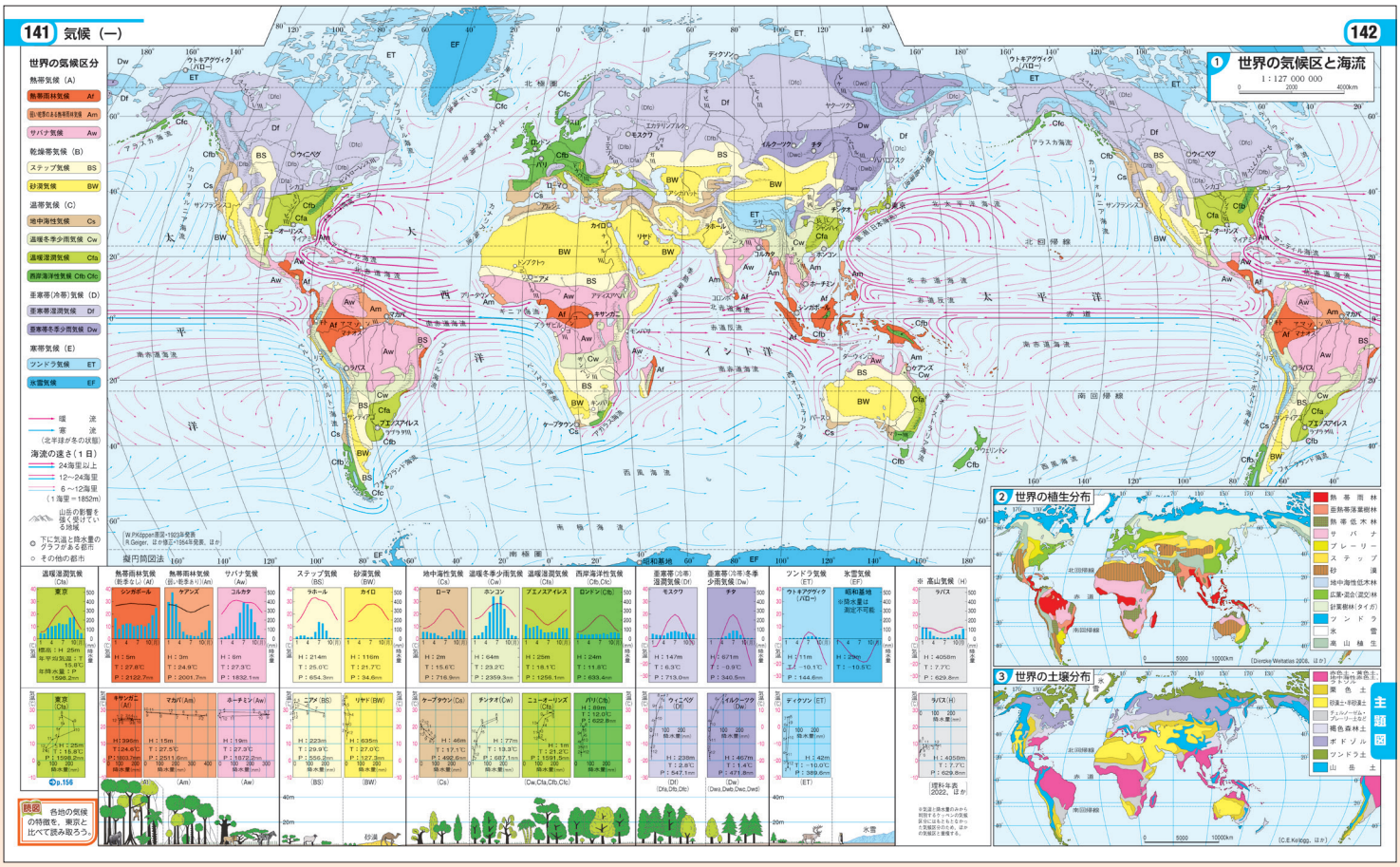

図1 『新詳高等地図』p.141～142「気候（一）」

授業ではこう使う！ 色別に気候区分が分かれていることを利用して、まずは緯度による気候帯の分布の特徴を確認する。そのうえで、地図帳（ 図1 ）で雨温図と共に挙げられている都市に印を付けたうえで、各気候区の分布の傾向や特徴について注目する。

緯度や海流などの気候因子によって、気候区の分布に特徴が見られます。

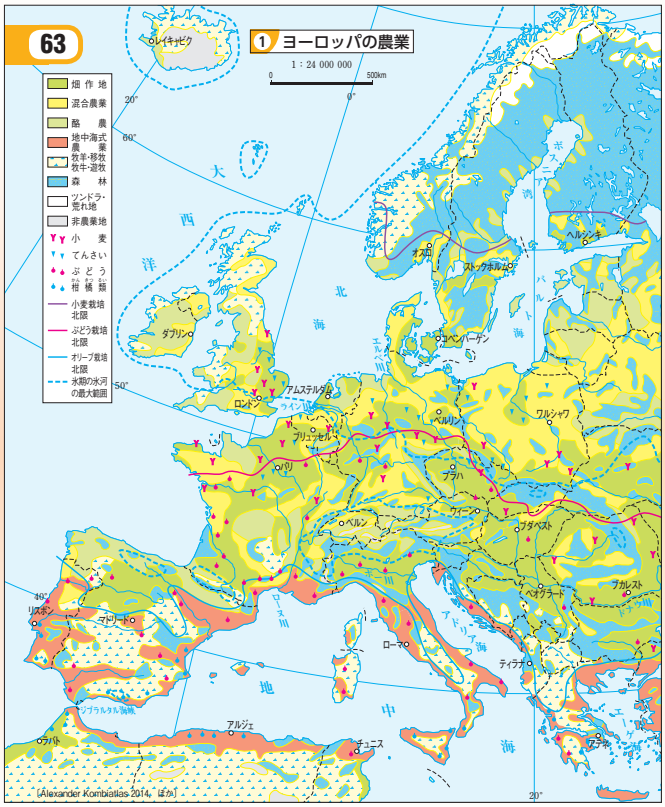

図2 『新詳高等地図』p.63「①ヨーロッパの農業」

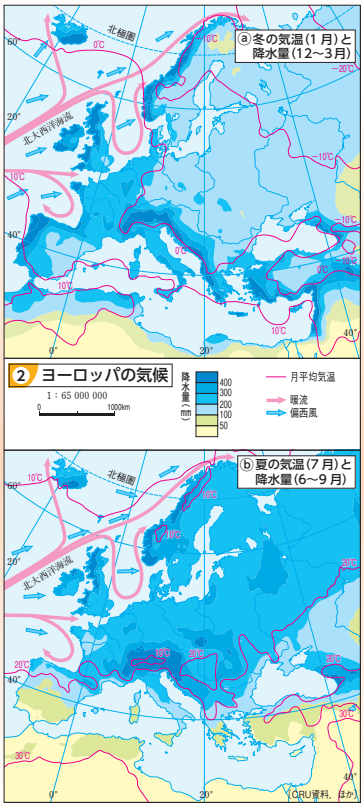

図3 『新詳高等地図』p.63「②ヨーロッパの気候」

授業ではこう使う！

図2 図3 から夏と冬の気温と降水量の季節変化に注目しながら、それぞれの地域の気候の特徴と農業の特徴について関連づけて説明できるようにする。夏に高温乾燥の気候となる地中海沿岸ではぶどうや柑橘類などの樹木作物の栽培が盛んな一方、大西洋や北海に面した地域では年中湿潤な気候をいかして小麦を中心とした穀物の栽培が盛んであることに注目する。

小麦やオリーブの栽培限界の線にも注目すると、小麦が主食としてヨーロッパ全域で栽培されている点や、オリーブが地中海沿岸でのみ栽培されていることなどが分かります。